

若手研究者に想う — 小さくとも世界 No.1 の “Small Giant Company”を目指してきた立場から

フロンティア・ラボ (株) 渡辺 忠一

私は、東北で仙台に次ぐ小都市;郡山市にしながら、会社創立時点から分析の一分野で世界 No.1 を目標にして、今から 18 年前に創業した。ここではその経験を振り返りながら、表題のタイトルで一文を寄せ、志を持てば;片田舎にいても世界 No.1 が達成できるということを知って頂き、若手研究者にチャレンジ精神の奮起を促したい。

会社創立当時の 1991 年前後は、日本のバブル崩壊の兆しが明らかに見え、テレビ・新聞・雑誌などでは不景気が報道され、すでに日本経済は下降線を辿っていた。そうした最悪の時期に、わずか 2 名で創業に踏み切ったが、当初から志が高すぎると、いずれの親戚・友人・知人からも言われ、他人から見れば正に無謀と言うほか無かったと思うが、私はそうでなければ創業する価値が無いと信じていた。そのビジネスとする製品は、ある大学教授が 10 数年をかけた基礎研究の成果である GC の心臓部を担う“世界初の金属製キャピラリー分離カラム”であり、もう一つはすでに多くの基礎研究報告があるにも関わらず、当時はまだ一般に広く利用されていなかった、縦型の熱分解装置であった。これらは現在も会社の両輪として活躍している。

私は最初から分離カラムを基礎研究からするつもりで創業したわけではないが、自分もその研究開発に 20 年以上に渡り従事した経験があるので、仮に何らかの問題があっても何とか乗り切れるであろうと、当時は無謀にも高をくくっていた。しかし実際には、創業当初の数ヶ月の段階から、キャピラリー分離カラムの製造歩留まりが 10% 以下という、大きな暗礁に早くも乗り上げてしまった。正に 1 年未満で倒産の危機に直面したわけである。そのために当然資金は底を着き始め、自分の甘さに同僚とその家族をも巻き込んだ状況を悔やんでみたがどうにもならない状況であった。しかし、友人の弁護士と株主の援助のお陰でこの事態を何とか乗り切ることができた。一般に、前人未踏のものには恐ろしい魔物が潜んでいると言われていたが、その当時は私や知人達が、それまでの“勘と経験”を総動員

してもいかんともできなかった。今にして振り返れば東北大学の 大見 名誉教授が言われる“国際競争力のある独創的な技術開発には、学問に基づく本物の産業技術が重要であり、そのためには己の勘と経験の世界に加えて、確固たる学問に立脚した洞察力と実行力が大切である”という見地からの解決法が必要であった。そういうことで、創業当初からこの世界初の製品を開発し、しかも安定した生産と販売を継続することによって、お客様からその対価を頂くことは生半可でないことを思い知らされた。また、学術的な研究成果、それに基づいた試作化と商品化とは、全く異次元のものであることを肌で学んだのである。さらに、一度でも奇跡的に製造できた経験を励みとし、諦めないで“できるんだ、するんだ”という執念を持続することが如何に重要であるかをも体得した。考えに考え抜いてこそ成功に辿り着けるもので、成功と失敗は表裏一体であるとはよく言ったもので、ちょっとした事実を見逃したりせずに、加えてファールのようにじっくりと現象を観察することで、意外とその薄皮一枚をすりと潜り抜けることもできることを知った。

ここで話は変わるが、東北大学加齢医学研究所医の川島教授が言われているように、脳の機能は一般的に 20 歳頃を境に減衰の一途を辿るが、65 歳頃を頂点として 50-80 歳の範囲では、知識を問う試験成績においては 30 代よりも優れているという。つまり 140 億個もあると言われている脳の引き出しの中味には、知識に加えて勘と経験に基づき、それらが相互に関連した状態で理路整然として詰まっており、その総合判断力は 65 歳頃で極大値をとるそうである。現在のコンピュータが如何に優れていると、あるいは元気な若人がいくら束になったとしても、年月を経て集約した英知には適わないことも多々あり、一般的にその道の専門家の知識と洞察力にはかなわない。しかしながら、多くの場合彼らも自分の経験というタガにはまった考え方から、脱却できない場合もあることも事実である。これは別の言葉では、融通が利かないともいえるが、されど、若人はこの集約した総合判断力の頭脳をうまく活用しない手はないし、また有効に生かされれば専門家としても嬉しいのではなかないかと思う。

現在は、インターネットが世界の境界を事実上なくし、世界のどこに居ても瞬時に多くの望む情報を得る事ができる時代であることは、衆知の事実である。インターネットを用いた Skype は電話革命に値するが、世界中のあらゆる

る所へ何時間話しても無料の時代が実現しており、これを使用すればかなりの経費節減にもなる。無料といっても、そこで求められることは、コミュニケーションに必要な語学手段となるが、それにも増して重要なことは母国語で理路整然と考え、議論できる基礎力をつけることであろうと思う。

それと平行してこれからの若人は、この狭い日本で、東京などの大都会でなければビジネスが出来ないなどという時代は、確実に去ったことを再認識すべきであろう。私は創業当時から都会でビジネスを開業する必要を感じず、当社製品カタログ表紙には世界地図を描いて、その一つに東京と郡山の位置は、殆ど同じであることを主張してきた。確かに新卒の採用となると、地方であるという理由で敬遠され、優秀といわれる若人の採用が極めて困難であることは事実であった。しかし、外国人の採用においては、東京駅から1時間30分弱というアクセスの良さと、果物の美味しいこの地区はプラスの要因であった。若人にとっては、新たな環境で自分がどう成長し、何に生甲斐をかけてチャレンジできるかが重要である。この点から、両親から頂いた限りない可能性と潜在能力に磨きをかけ、そしてそれらを生かすチャレンジ精神を養うことが、むしろ大切ではないかと思う。